



都市の立地と都市システムに関する計量地理学的研究

人文科学系・人文社会学領域

石崎 研二

教授

ISHIZAKI Kenji

博士(理学)(首都大学東京)

■研究キーワード 都市地理学/計量地理学/地理情報科学

■主な所属学会 日本地理学会/人文地理学会/経済地理学会/日本都市地理学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.7c796d0f5a464ce3520e17560c007669.html>

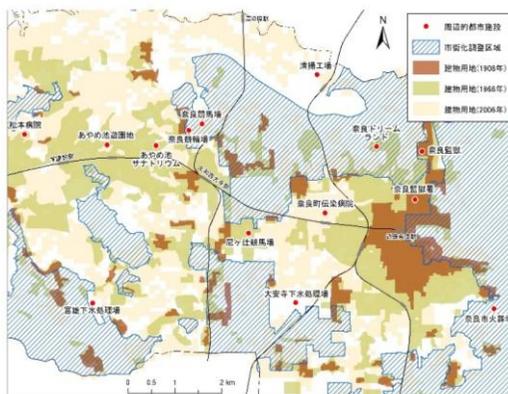


研究者総覧

研究概要

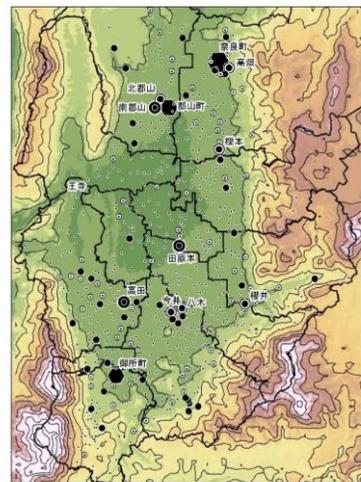
研究対象として関心があるのは、都市あるいは都市内部に展開する経済活動の立地現象です。これまで、以下の3つの研究課題に取り組んできました。一つは、都市や商業集積地の立地論である中心地理論を数理モデルの観点から再解釈する理論研究。もう一つは、地理情報システム(GIS)や計量的手法を用いた商業施設などの立地分析に関する実証研究。そして最近の課題は、複雑ネットワーク科学の視点をもとに、都市間結合や企業間のつながりと都市の発展・衰退のメカニズムを明らかにする都市システム研究です。

1. 経済立地論の一つである中心地理論の再解釈に関する理論研究
2. 商業施設をはじめとする様々な都市施設の立地分析
3. ネットワークとしての都市間結合や事業主間の関係性に着目した都市システム研究



↑奈良市における周辺の都市施設の分布

明治期の奈良盆地における中心地の分布→



研究のプロセス・研究事例

1. 都市(中心地)の立地の法則性を追求した中心地理論は、1933年のクリスターラーによる著作以来、都市の立地に関心を持つ多くの研究者を魅了してきました。しかし、中心地がいかにして成立するかという中心地の配置原理については、曖昧に取り扱われてきました。私は、公共施設の最適配置を求める際に利用される立地・配分モデルや数理計画法を用いて中心地理論を最適化問題として捉え、理論の再解釈を試みてきました。その結果、オリジナルの中心地理論を包括・拡張しうる一般化モデルを提示することができました。実証研究としては、明治期の奈良盆地の中心地の復原などを手がけています。

2. 日本で本格的にGISが普及し始める1990年代後半から、商業施設の立地分析や居住環境評価などへのGISの応用に取り組んできました。GISの空間分析機能や統計学的手法など、様々な計量的手法を用いて都市内部の諸施設の立地現象を定量的・客観的に把握する試みです。その際、表面的な立地パターンの分析にとどまらず、例えば経営学やマーケティングの成果を踏まえたコンビニエンスストアの立地分析や、都市化の指標としての周辺の都市施設(NIMBYなど)の立地動向など、立地現象を解釈するための独自の視点や考え方を積極的に取り入れてきました。

3. 最近関心を持って取り組んでいるのは、2000年代以降に進展した複雑ネットワーク科学の視点と理論を都市システムに応用する研究です。とくに自己組織化や創発といった考え方は、都市と都市とのつながりや都市の発展・衰退に関する研究テーマに新たな視角をもたらすと考えています。直近の研究課題は、戦後昭和期に発行された『商工名鑑』を用いて、事業主間の関係、それが中心地と周辺地域の発展・衰退に与えた影響について明らかにすることです。